

瀧山信仰に係る史跡（遺構）と「茗荷」^{みょうが}の探査報告書

（大沼 ^{かおる}香）

私の身近な地域で瀧山信仰に係る遺構（史跡）と「茗荷^{みょうが}」が結び付いている所について、下表のと
 おりの3箇所を取り上げて見ます。

件名	民家まで直線距離
1. 瀧山古道岩波口「さんきょう院 跡地の石積み遺構と 茗荷 ^{みょうが} 」について	一番近い民家まで約 300m、 半径 300m 以内に民家なし。
2. 平清水奥「南竜山不動尊 護摩堂跡地にある茗荷 ^{みょうが} 」 について	一番近い民家まで約 750m、 半径 750m 以内に民家なし。
3. 瀧山古道成沢口「ひなくぼ墓地 跡にある茗荷 ^{みょうが} 」 について	一番近い民家まで約 720m、 半径 720m 以内に民家なし。

身近に存在する「茗荷」は「東アジア（温帯）が原産。人間が生活していたと考えられる場所以外では見られないことや、野生種がなく、大陸から持ち込まれて栽培されて来たと考えられる。繁殖は地下茎による栄養体繁殖が主体である・・・」とされています。我が国の自然界（山野）に自生していたものではないということです。

「茗荷・ミョウガ」は日本においては自然界に自生するものではない中で、もしも、今は人家がない山間に「茗荷・ミョウガ」が生えているとすれば、人間が持ち込んだ明らかな証拠だとされているからです。ここで問題視する要件は次のとおりです。

✓¹ 今になっては、人の住居がない山間地森林の中であって、

✓² そこには^{※1}人々と何らかの係りがあった^{※2}史跡遺構が今にあること、根拠を以って存在が確認されていること。

※1；人々とは、一般人(大衆)ではなく、宗教施設等に係った人をいう。

※2；史跡遺構とは、行政史や地元の歴史書等に記載されている宗教施設等であることをいう。

の上で、「茗荷」が今に生えているならば、まさしく宗教施設等に係るその場所で関係者が生活していた証、活動拠点であった証拠と見做すことが出来るものと考えています。

その目的は精進料理食用もあろうが、鬼門封じの意図もあったのではないかという見方もあります。ただし、ここで課題としているのは、昔存在していた一般家庭の人家云々ではありません。あくまでも、史跡に係るものを対象とします。

はなはだ恐縮ではあるが、この3箇所の史跡跡地については、ほとんどの地元歴史関係は知っているが、「茗荷^{みょうが}」との結び付きから現地探査の上で考察したのは私だけではないかと自負する処があります。

1. 瀧山古道岩波口「さんきょう院 跡地の石積み遺構と茗荷」について

(1) 本跡は、瀧山信仰と密接不可分な関係にあった寺蹟（坊跡）であります。本跡に係る資料を「瀧山の歴史—二〇〇四（平成一六）年一〇月一日 同編集委員会編纂）—」より抜粋し掲載して見ます。同史 105 頁には「三峽院」、146 頁には「三境院」、そして次頁図-1 には「山境院」と文字に表記の揺れはあるが、同じ場所の同じものを指しています。それらの細部は別記しています。

第四章 中世の瀧山



瀧山中腹の姥神

の多い。蔵王地区半郷の「松尾院」（松尾山観音）「日光院」成沢からの参道に残る遺跡などがある。成沢口の鳥居は、滝本家文書によれば天仁二年（一一〇九）の建立となっており、昭和二十七年（一九五二）国の重要文化財に指定されている。この石鳥居の石材を採掘したと伝えられる場所に石材が今も横たわっている。岩壁に刻まれた磨崖仏、地藏堂境内に残る六面幢（笠佛）と板碑、塔の前の層塔、ひなくほの墓地に残る五

147

政三年（一七九一）のものである。土坂観音堂の草創は不明であるが「十一面観音」を祀り、境内には明和五年（一七六八）の「庚神供養塔」と安政七年（一八六〇）の岩波邑石行寺住職大阿闍利昌圓供養導師の「宝篋印塔」が建っている。阿弥陀清水には「南無阿弥陀仏」の碑が建ちその下に「春夏」「秋冬」「水鏡」と書かれた三面の歌碑がある。享保三年（一七一八）七月十七日の建立である。願主は不明だが文学碑としての価値は高い。側に二基の墓石がある。僧侶のもののようなのである。一「地藏菩薩」「聖観音」「馬頭観音」「蔵王大権現」といわれ、いずれも千百年以上を経ているといわれている。瀧山仏教を語るに貴重なものである。瀧山地区には観音堂、寺院跡出土品など多く残されている。また瀧山の閉山によって三百坊は徹底的な打撃を受け、下の村落に下ってきたといわれている。

「三境院」跡がある。石行寺の過去帳にあることから寺跡であることは間違いない。八森の「清水観音」は源頼義が前九年の役（永承六年一一〇五）に勝利を祈願した「清水観音」を祀り凱旋したと伝えられている。十一面千手観音である。水月庵跡や石沢文十郎家所有の「護摩鉢」、山神社社の二枚の祈祷札には医王山瀧山寺（瀧山寺）と明記されており、寛正四年（一四六三）と寛政三年（一七九一）のものである。土坂観音堂の草創は不明であるが「十一面観音」を祀り、境内には明和五年（一七六八）の「庚神供養塔」と安政七年（一八六〇）の岩波邑石行寺住職大阿闍利昌圓供養導師の「宝篋印塔」が建っている。阿弥陀清水には「南無阿弥陀仏」の碑が建ちその下に「春夏」「秋冬」「水鏡」と書かれた三面の歌碑がある。享保三年（一七一八）七月十七日の建立である。願主は不明だが文学碑としての価値は高い。側に二基の墓石がある。僧侶のもののようなのである。一「地藏菩薩」「聖観音」「馬頭観音」「蔵王大権現」といわれ、いずれも千百年以上を経ているといわれている。瀧山仏教を語るに貴重なものである。瀧山地区には観音堂、寺院跡出土品など多く残されている。また瀧山の閉山によって三百坊は徹底的な打撃を受け、下の村落に下ってきたといわれている。

「山境院」と文字に表記の揺れはあるが、同じ場所の同じものを指しています。それらの細部は別記しています。

146

第三章 瀧山の仏教

一、仏教の隆盛と瀧山

瀧山地区の仏教は、瀧山からはじまるといえる。時代は不明だが、平安時代から鎌倉時代には、それぞれの宗派が存在し、国家の政治体制の中において動いていたと考えられる。中核田町内会保存の文書『出羽国最上瀧山寺縁起之史』に、「抑仁寿元年（八五一）廻国修行之砌三月六日甲辰見彼山入有一瀧……」に始まり、「是慈覚大師御口作也」とし、「天安二年（八五八）戊午五月二日寫。應徳元年（一〇八四）十月中旬瀧山於院主御坊」「大治三年（一一二八）立石寺南院書之二位公於岩本房書之」とある。この口伝によれば、慈覚大師（円仁）によって仁寿元年に開かれたということになる。慈覚大師が、山寺立石寺開山（八六〇）前に瀧山を開いたと言いつづけている。平清水平泉寺の「由緒分限御改帳」天保十二年（一八四一）にも記されているところを見ると、瀧山開山についての口伝は、瀧山地区一円に広がっていた口伝であったと思われる。

慈覚大師の廻国巡行の伝説は多い。特に東北との関わりはとりわけ深い。天長六年、七年（八二九〜八三〇）頃、東北巡錫があったことは事実とされているが、他は、歴史的事実として確かめる史料がない。東北地方の寺院で円仁の開基中興の寺が百五十余あり、円仁が唐から帰国した後の嘉祥から貞観にわたっているが、ほとんどが伝説で、天台宗の東北浸透を語っているものと思われる。当時、国家権力や貴族・武家の勢力争いと相まって、各宗派の布教争いがあった。

円仁は、仁寿元年八月、唐の五大山で「念仏三昧法」を始修、九月「鎮国灌頂」を始修、仁王会の御前講師となり、また『金剛頂経疏』七巻を著す。帰国後、斉衡元年（八五四）四月天台座主に補任されているが、こうした状況の中で来錫は可能だったろうか。円仁の弟子安慧が出羽国教師として六年間布教につとめ宗徒をふやしたと言われる（山寺立石寺では、開山慈覚大師、開祖安慧としている）。このことが慈覚大師の東北来錫と関わりがあるのではないかと想像するだけである。

瀧山地区には、石行寺・平泉寺・耕龍寺・萬松寺・耕源寺がある。いずれも草創時は天台宗であったという。現在は石行寺、平泉寺が天台宗。耕龍寺・萬松寺・耕源寺が曹洞宗である。草創時天台宗であったのは、それだけ天台宗が広く、各集落や各地の豪族たちの民間信仰と呼応して広まったと考ええる。行基開基、慈覚大師中興の説が生まれたのは、初期においては格別の区別もなく、信仰されていたものと考えられる（行基は法相宗という）。

行基の布教は、国家統制の中で「小僧行基」と弾圧されたが、池溝開発など土木事業を行い、寺院（四十九院）施設、布施屋を建て、民衆の貧困救済を行い、民衆からの信仰が篤かった。官廷も行基の力を借りなければならぬことになり、行基は大仏造営勸進を弟子たちを集めて行っている。天平十七年（七四五）に大僧正、天平感宝勝宝元年（七四九）歿す。活動の範囲は近畿地方が中心といわれている。巡礼布教に努めたが東北廻行の確かな証拠はない。

瀧山は山岳信仰のメッカであった。修験道に励む行者、修業僧、聖たちの廻行修業が盛んでそれともなつて坊も多かったと思われる。三百坊をはじめ石行寺八坊、ナタ切山、平泉寺十二坊、枇杷田坊、戸神坊、下八森坊山三峽院、中核田東大坊、牡丹山八十三坊など坊跡として名が残っている。

105

(2) 次ページ写真の説明

図-1	図-2	図-3	図-4	図-5
瀧山歴史マップ より抜粋	国土地理院地形図上の現地 (GPS で特定)	茗荷の植生 (2m 弱×2m 弱)	石の祠 (不動明王があった?)	石積みの全体状況

- ・下段石積みで囲まれた壇（境内）の広さは約 35×約 40m 四方です。この場所（お堂・お寺の跡地）にも「茗荷」（1坪程度）が今に生えており、明らかに人の住処があった証拠であります。
- ・現在は杉林になっているが、地権者によると戦中・戦後に先代が植林したということです。

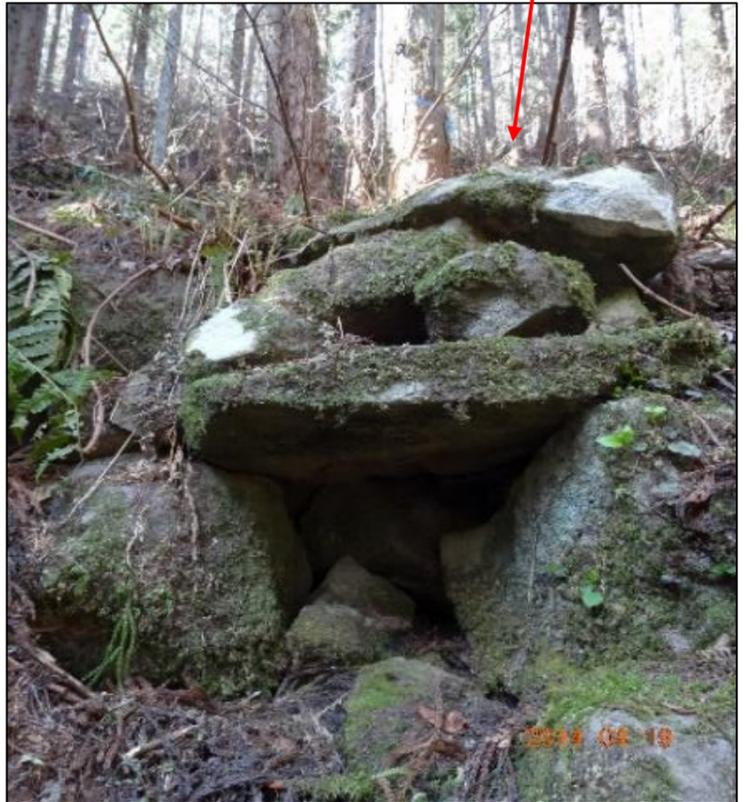


図-4

あらためて、この地域一帯は、もちろん人家（作業小屋等）は無し、戦中・戦後に植えたという杉林の中です。
 知っているのは地元でも本の一部の人達だけです、歴史関係者でも話としては知っていても、現地を確認した人はさらに少ないと思います。

図-3

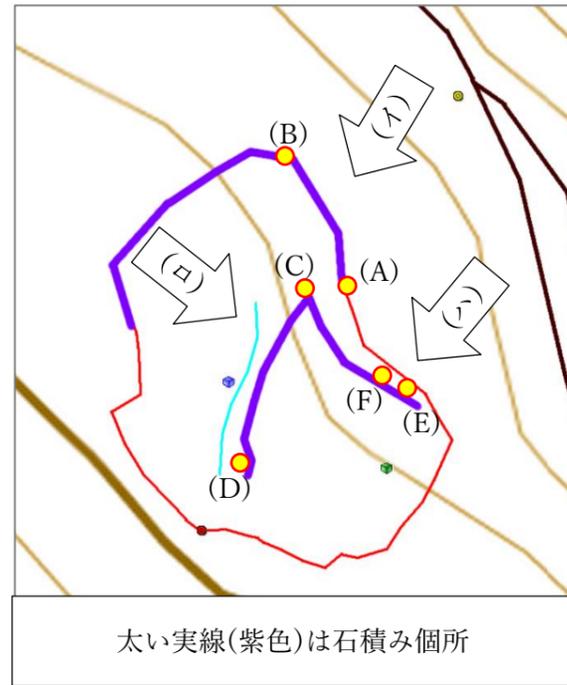
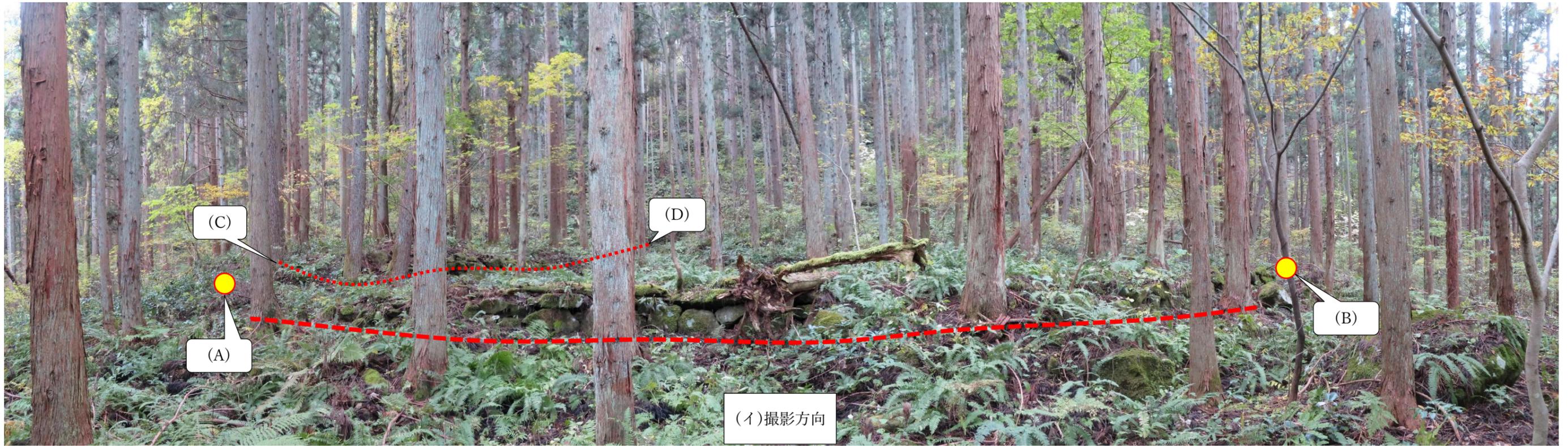


図-5



(end)

2. 平清水奥「南竜山不動尊 護摩堂跡地にある茗荷^{みょうが}」について

○ 「南竜山不動尊」に係る歴史的経緯は左のとおりです。

この場所（護摩堂の跡地）に「茗荷」が今に生えており、明らかに人の住処があった証拠であります。

南竜山不動尊（本尊不動明王）

――歴史の散歩道案内人会の資料より抜粋――

当山の開基は、釈妙現比丘尼。平清水村農夫善助の嫁オユキは、長く目を患い不動明王の信仰殊の外厚かった。或る夜、霊夢のなかに南竜山に不動明王が示現し、南竜山の滝で洗眼したところ、オユキの目が開眼した。オユキは益々不動明王を信仰し、明和六年（一七六九）お堂を建て尼となり妙現尼と称した。安永九年（一七八一）信者三日町、鈴木宇右エ門が拜殿と籠堂を建立し、益々崇敬を集めるに至った。

弘化四年（一八四七）六月二十八日柏山寺の弟子覚忍房良海が発頭人で、越後国菅谷不動尊を還し、南竜山に石像を奉納した。弘化四年八月二日村中於南竜山参道を掃除、平泉寺から石像を滝壺に持行し安置した。八月二十八日石像開眼供養を行った。（導師山王・承仕 覚忍房・施主 山崎源兵衛）
同年十月十五日開眼供養の施主、山形横町 山崎源兵衛が護摩堂を建立した。目の不動尊として参詣者が絶える事なく、広く信仰の場として明治末期まで続いた。

大正七年平清水部落の総意によって護摩堂が代金百円で売却、その利子を資金として例祭と参道の掃除にあてた。例祭と参道掃除は、町内会行事で今も継承されている。

平泉寺文書（山形市史資料第五七号）

○ 弘化四年（一八四七）六月二十八日、山形前柏山寺瓊海の弟子覚忍房良海発頭人二而、当南竜山江越後国菅谷不動尊ヲ還シ石像奉納、日鑑ニ委ク記ス

○ 同八月二日、村中於南竜山道掃除、石像当寺之庭ヨリ南竜江持行、明三日開眼供養可仕処、二十八日二日延

○ 同二十八日、石像開眼供養

導師山王

承仕 覚忍房

施主 山崎源兵衛

1847 当日護摩修業仕候

○ 弘化四年十月十五日、南竜山ニ護摩堂建ル

施主 山崎源兵衛

○ 由緒分限御改帳

一、南竜山不動明王

線刻？

1769

右本躰古瀬（巨勢）金岡筆之絵像、明和六丑年四月三日、右山林ノ滝へ出現、東西南北遠近之老若男女群

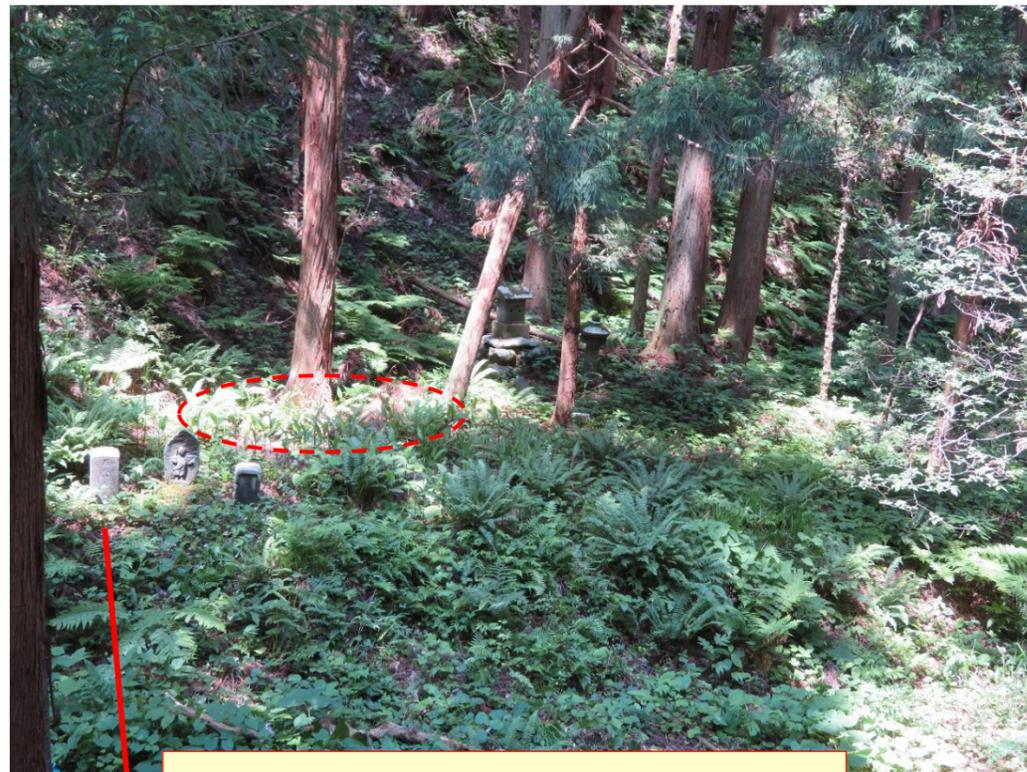
集如市町、二十余年繁昌仕、当時参詣稀也、右之両像者年久敷大日宮殿ニ納リ有之候ヲ、不在罷有候処、

右同年五月二十一日、妙現尼ト申者へ霊夢ニ御座候趣、縁起ニ相見へ申候、当山三十世昌運代、右山林滝者

当山ヨリ十三丁入二有之候



(※) ① 護摩堂跡地全景、跡地には石の祠が祀られ、不動明王像他の石碑が安置されている。



(※) 不動明王像の後ろ（西側）に茗荷の植生（1坪程度）が見える。



あらためて、この地域一帯は、もちろん人家（作業小屋等も）は無し、戦中・戦後に植えたと思われる杉林の中です。歴史関係者を除き、現地を確認の上で知っている人は少ないと思います。



② 滝壺の（線刻）不動明王像



3. 瀧山古道成沢口「ひなくぼ墓地跡にある茗荷^{みょうが}」について

○「瀧山の歴史―二〇〇四（平成一六）年一〇月一日 同編集委員会編纂―」より抜粋し掲載して見ます。本跡も、瀧山信仰と密接不可分な関係にある寺蹟です。この場所にも「茗荷」が今に生えており、明らかに人の住処があった証拠であります。

政三年（一七九一）のものである。土坂観音堂の草創は不明であるが「十一面観音」を祀り、境内には明和五年（一七六八）の「庚神供養塔」と安政七年（一八六〇）の岩波邑石行寺住職大阿闍利昌圓供養導師の「宝篋印塔」が建っている。阿弥陀清水には「南無阿弥陀仏」の碑が建ちその下に「春夏」「秋冬」「水鏡」と書かれた三面の歌碑がある。享保三年（一七一八）七月十七日の建立である。願主は不明だが文学碑としての価値は高い。側に二基の墓石がある。僧侶のもののようなのであるのを見ると、ここにも庵があったのかと思う。上桜田熊野神社の四基の古仏も忘れられないものである。「地藏菩薩」「聖観音」「馬頭観音」「蔵王大権現」といわれ、いずれも千百年以上を経ているといわれている。瀧山仏教を語るに貴重なものである。瀧山地区には観音堂、寺院跡出土品など多く残されている。また瀧山の閉山によって三百坊は徹底的な打撃を受け、下の村落に下ってきたといわれているものも多い。蔵王地区半郷の「松尾院」（松尾山観音）「日光院」成沢からの参道に残る遺跡などがある。成沢口の鳥居は、滝本家文書によれば天仁二年（一一〇九）の建立となっており、昭和二十七年（一九五二）国の重要文化財に指定されている。この石鳥居の石材を採掘したと伝えられる場所に石材が今も横たわっている。岩壁に刻まれた磨崖仏、地藏堂境内に残る六面幢（笠佛）と板碑、塔の前の層塔、ひなくぼの墓地に残る五



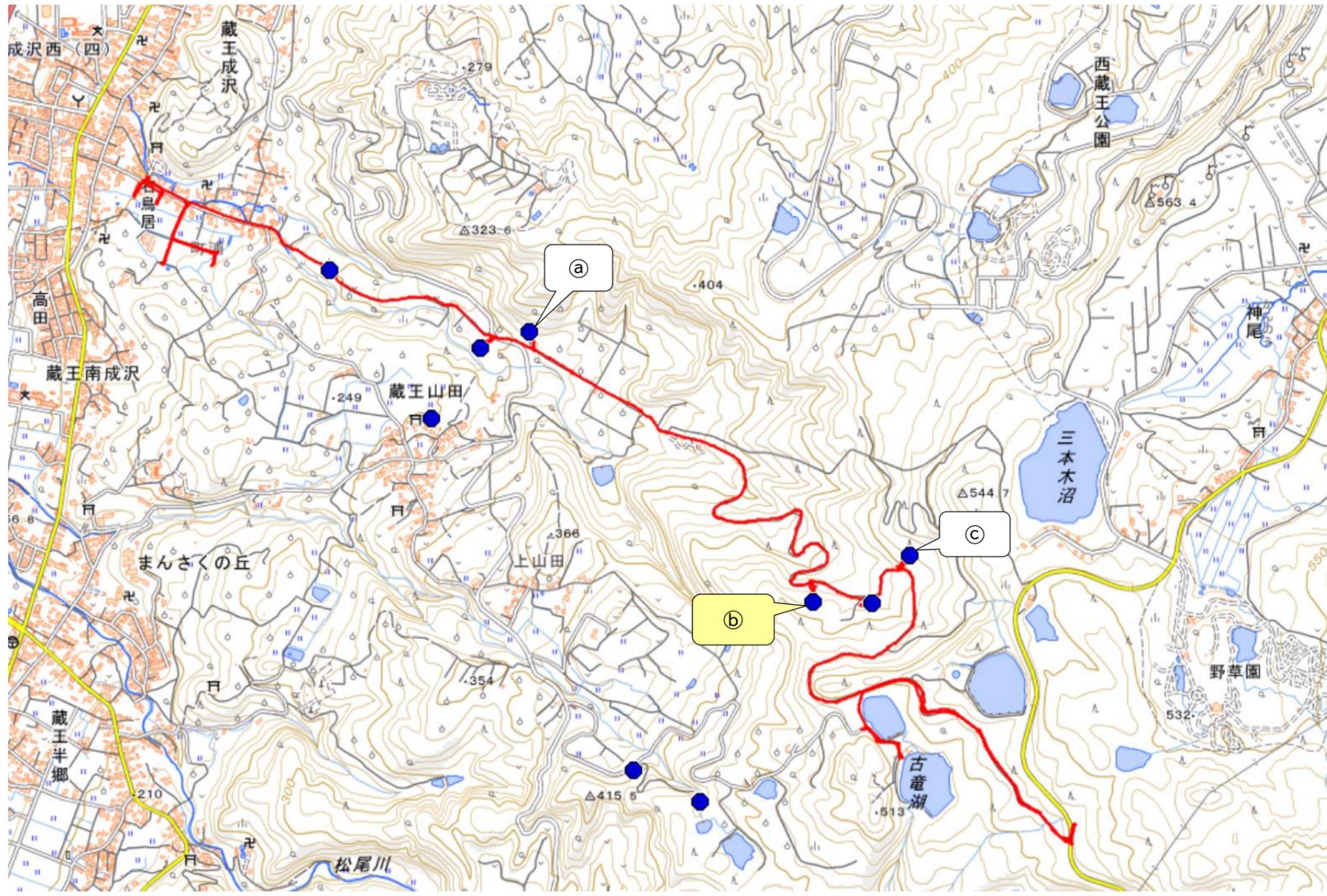
瀧山中腹の姥神

輪塔の数々、板碑、滝の前の清水、隆勝寺跡、この近くから十一面観世音菩薩の懸仏が出土している。京都粉河の作品で八百年前のものとのことである。鐘楼跡、浄楽寺、熊野堂、昆沙門堂の建物跡などあり、昆沙門堂跡の近くからは五銖鈴が出土している。常善寺も隆勝寺と共に衰退し、今は現在の地に下り浄土真宗の寺となっている。成沢山三蔵院、流泉寺（天台宗）は瀧山の閉山により神尾から下ってきたといわれ、神尾に地藏堂と呼ばれる御堂がある。ここが三蔵院の跡といわれ、「三蔵院屋敷跡」と呼んでいる。三蔵院は現在八幡神社宮司の滝本家が前身で、滝本家は今も昆沙門天、大黒天、不動明王を祀っている。滝本家は明治元年の神仏分離令より神職となった。

瀧山、蔵王地区の瀧山、三百坊にまつわる多くの史蹟があり、伝説も多い。平泉寺の『由緒分限帳』に「古来三百坊有之候、只今其坊跡を三百坊と唱ひ来候、其砌者当寺（平泉寺）者右三百坊之本坊二而瀧山貫主と申候由……」とあるように平泉寺が瀧山貫主をつとめた。先に山の惣勢、石行寺学頭相勤め」とあるように石行寺、平泉寺が三百坊を統括して、おおいに隆盛を極めたものと思われる。現在、三百坊に残る赤石造の鳥居は赤石原からのもので、そばの華表碑には「慶応二年（一八六六）麓の信者によって奉納された」とある。幕末の混乱期にこの鳥居を建造するという信仰の力をもっていたことは驚嘆に価するといわねばならない。

持仏と思われる不動明王（たて三・七センチ、横二センチ）が鳥居の近くの開墾地から出土した。昭和十九年頃のことである。

年月不明だが住時の信仰の姿がみられるものと思う。



©小荷駄町隆勝寺の元の場所



⑥ ひなくぼ 墓跡 板碑の裏手に「茗荷」(二坪程度)が生えていた。
 (平坦地が2段になっています、明らかに建物があったと思われる土地です。)



① 地蔵堂跡「板碑」

特に⑥について、あらためて、この地域一帯は、もちろん人家(作業小屋等)は無し、戦中・戦後に植えたと思われる杉林の中です。歴史関係者を除き、現地を確認の上で知っている人は少ないと思います。

(end)
 (end)